

## ヤングケアラーについての実態調査 ー過剰な家庭内役割を担う中学生ー

北 山 沙和子\* 石 倉 健 二\*\*

本研究は、過剰な家庭内役割を担っている子ども（ヤングケアラー：YC）についての実態調査と、彼らが抱える問題について明らかにすることを目的とし、2つの中核市の全ての市立中学校のクラス担任を対象に質問紙調査を行った。有効回答率28.9%で、回答の得られたクラスに在籍する生徒の総数は4,420名であった。分析の結果、1.2%の生徒がYCである可能性が示された。主な家庭内役割は「きょうだいの世話」と「家事全般」であった。そしてそうした生徒の学校生活上の問題として「忘れ物の多さ」が指摘された。そうした過剰な家庭内役割の背景には「ひとり親家庭」であることが最も多い回答であった。YCにはその家族全体への支援が必要であり、学校はその発見に大きな役割があると考えられる。そして、YCについて学校教員が認識することと、中学卒業後と小学校以前についての実態調査が今後の課題と言える。

キーワード：ヤングケアラー（YC）、中学生、過剰な家庭内役割、家族支援

### I 問題と目的

近年、子どもと家族を巡る新たな問題として、「ヤングケアラー（以下“YC”）」が、イギリスをはじめとした先進国で注目され始めている（柴崎, 2005）。YCとは、家族が何らかの困難な状況にあり、そのケアの担い手となっている未成年の子どものことを指す。子ども自身が思春期という不安定な時期を迎えながらも、親や祖父母あるいはきょうだいに何らかの困難が生じた場合、彼らが「ケアの担い手」とならざるを得ないことも少なくない。しかし、こうした病気あるいは障害など、何らかの困難を抱えた家族をケアする子どもの存在は、ごく最近までほとんど知られてこなかった。

家族のケアを担う子どもに関する研究は、1990年代初頭に英国で開始され、ラフバラ大学の「介護を担う子ども研究グループ（The Young Carers Research Group, 以下“YCRG”）」と「英国介護者協会（Carers UK）」の作業や取組により関心が寄せられるようになった（三富, 2010）。

このような子ども達は、「チャイルド・ケアラーズ」「ヤング・ケアラーズ」「ヤング・ケアギバー」など、様々な名称があるため、本研究では家族へ何らかのケアを行っている子どもを「YC」と称することとする。また、YCである子どもの定義も複数存在するため、本研究では「障害あるいは何らかの困難を抱えている親やきょうだい、あるいは祖父母等の『介護』や『看護』もしくは『世話』をすることの責任を、成人と同等に担っている18歳未満の子ども」をYCと定義することとし、比較的軽いケアを担っている場合も含むこととした。

YCの担っているケア内容は大きく次の6つに分類することができる。①調理や清掃などの家事援助、②移動の介助や与薬などの一般的な介護、③入浴や用便などの身なりにかかわる援助、④情緒的な支援、⑤弟や妹の世話、⑥金銭の管理や通院への同行などの作業である（三富, 2008）。英国では、早くからこのような子どもの問

題に着手し、様々な調査・研究、支援が行われている。

1996年に行われた英国全国統計局（Office for National Statistics Social Survey Division, 以下“ONS”）の調査によれば、8～17歳までの子ども約700万人のうち、3万2千人（約0.5%）がYCか、それに極めて近い存在であると報告されている。

そしてケアを行うことがこうした子ども達の生活に与える影響は多岐にわたっているが、大きく次の5つに分類されている（三富, 2000）。①家族生活における親子関係の逆転、②不登校などの教育問題、③社会的な孤立に象徴される社会生活および友人関係、④低所得と貧困に見られる経済生活、⑤人格の形成と就職問題である。こうした様々な生活への影響がある中、学齢期の子ども達にとって、最も深刻な問題は、教育を受ける権利の侵害である。特に遅刻・早退・欠席は非常に大きな問題である。これらはケアによる時間的拘束に伴うもので、彼らの学力や就学機会を制限し、さらには友人関係の乏しさなどといった、学齢期における社会性の獲得にも大きな影響を及ぼすことが示唆されている（ONS, 1996; C. Dearden & S. Becker, 2004）。さらに、親の介護や看護を行っている子どもの中には、ケアを担うことで成人同様の責任を負うため、成長の段階に似つかわしくない情緒的成熟を迫られることが指摘されている。それに伴う親子関係の逆転は、教育を受ける権利の侵害同様に、子どもの人格形成や社会性の発達など多岐にわたり影響を及ぼすと考えられる（三富, 2000）。

そこで本研究は、家族へのケアの担い手となっている子どもの実態把握と、彼らが抱える問題について明らかにしていくことを目的とする。このYCに関する問題は、18歳までの全ての年代で生じ得るものであるが、今回は中学生を対象として検討を行うものである。それは、中学生であれば一定の家庭内役割を果たす能力を持っていることが期待されるとともに、学校を通じた調査を行うことで地域内の全生徒を視野に入れることが可能である

と考えたためである。

## Ⅱ 方法

### 1. 対象

A 県 B 市（人口約27万人）と、C 県 D 市（人口約20万人）の全ての公立中学校39校に勤務する担任教員495名を対象に、質問紙調査を行った。

### 2. 調査方法

現在担任しているクラスに在籍する生徒について回答を求めた。質問紙は各校へ郵送にて配付し、特別支援学級も含む全ての学級担任に協力を依頼した。質問紙記入後は、各校で取りまとめ、返信用封筒に入れ、調査者宛に郵送での返送を求めた。なお調査期間は2011年7月8日～8月5日である。

### 3. 質問紙の構成と項目

質問紙は、ONS（1996）が使用した質問紙と C. Dearden & S. Becker（2004）の調査結果を参考に、調査者が日本語訳した上で改編したものをを用いた。質問紙の内容は、「(1)担任しているクラスについて」「(2)とても多くの家庭内役割を担っている生徒について」の2つに大きく分かれている。

（1）担任しているクラスについて

#### ①担当学年とクラスの人数

#### ②以下のような家庭内役割を担っている生徒の人数

「家事全般」「介助が必要な家族の身辺介助」

「介助が必要な家族の移動介助」

「家族の手話や外国語の通訳」

「きょうだいの世話の多く」「家族の書類や金銭管理」

「家族の薬の管理・投与」

#### ③家庭内役割のために生じる以下のような学校生活上の問題がある生徒の有無

「遅刻や早退が多い」「病気以外の欠席が頻繁にある」

「クラスメイトとの関わりが薄い」「保護者の承諾を得なければならない書類などの忘れ物が多い」

「身だしなみが整っていないことが多い」

「授業中に集中力を欠いたり居眠りが多い」

「お弁当を持ってこないことが多い」

「宿題や準備物の忘れ物が多い」

「部活に入っていないかったり休みが多い」

#### ④家庭内役割や家族との関係についての相談の有無

（2）とても多くの家庭内役割を担っている生徒について

#### ①前述「(1)③家庭内役割のために生じる学校生活上の問題」に1つ以上の○がついた生徒の人数。

#### ②前述「(2)①の中で、回答者が最も気になる生徒1人ないし2人について以下の回答を求めた。

「生徒の性別」「家庭内役割を担っている理由」

「1週間のうち、家庭内役割を行っている時間」

## Ⅲ 結果と考察

### 1. 回収結果

39校中18校から回答が得られ（回収率46.1%）、回答が得られた担任教員は495名中172名（回収率34.7%）、そのうちの有効回答は143名（有効回答率28.9%）であった。なお、回答のあったクラスの在籍生徒の総数は4,420名であった。

回収率と有効回答率が低いのは、本調査対象の分かりにくさがあったものと思われる。「過剰な家庭内役割で家庭生活や学校生活に大きな影響を受けている生徒」という視点は国内では一般的ではなく、調査の意図が理解してもらえなかった可能性がある。また、回収された回答の中に、無効回答や回答漏れが多かったことも、これらのことを反映していると思われる。

### 2. 担任しているクラスについて（Table1）

回答のあった143クラスとその在籍人数を Table1 に示す。1年生が最も多く回答が得られ、特別支援学級からも回答が得られた。

Table1 クラスについて

	クラス数 (回収率)	在籍人数
1 年生	50 (32.5%)	1,612
2 年生	40 (26.8%)	1,359
3 年生	41 (27.7%)	1,409
特別支援	12 (27.3%)	40
合計	143 (28.9%)	4,420

### 3. 家庭内役割を担っている生徒について（Fig.1）

7つの家庭内役割について、それを担っている又は担っているように見受けられる生徒の存在について質問した。これらの家庭内役割は、YC が担うことが多いとされるもので（ONS, 1996；C. Dearden & S. Becker, 2004）、いずれも通常のお手伝いの範囲を超えるものと考えられる。結果は、「きょうだいの世話」が40名（0.9%）、「家事全般」が38名（0.9%）で最も多い。

C. Dearden & S. Becker（2004）の調査では、「きょうだいの世話」はきょうだい児が知的障害児である場合に、圧倒的に多くなっていることが指摘されている。今回の調査では、そこまで踏み込んだ調査はできなかったが、きょうだいに障害がある場合や、弟や妹の年齢が低い場合に、こうした家庭内役割を多く担っていることが考えられる。

二番目として「家事全般」が挙げられているが、これはケアを必要とする家族成員の属性や障害種等に関わらず、YC が担う役割として最も多いものとして指摘されている（三富, 2008）。

また今回の調査で三番目にあげられている「通訳」は、C. Dearden & S. Becker（2004）でも指摘されているものであるが、本調査でもわずかながら確認された。

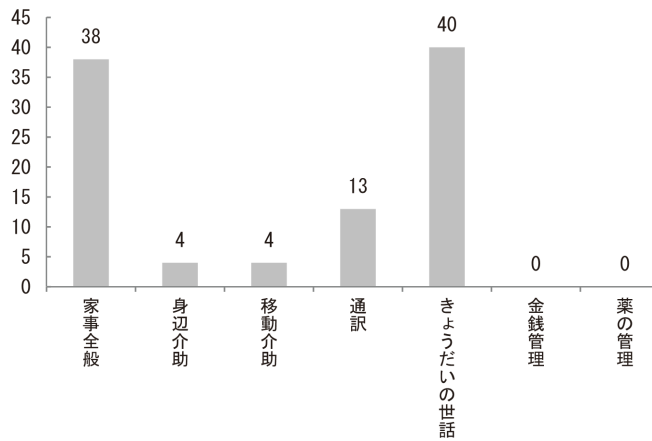


Fig.1 家庭内役割を担っている生徒の人数

#### 4. 家庭内役割のために生じる学校生活上の問題 (Fig.2)

家庭内役割が多いことで発生すると思われる、学校生活上での9項目について回答を求めた。これもYCに起こることの多いものとして指摘されているものである(ONS, 1996; C. Dearden & S. Becker, 2004)。

「宿題や準備物の忘れ物が多い」が23名(0.5%)、「保護者の承諾を得なければならない書類などの忘れ物が多い」が22名(0.5%)と、この2項目に該当する生徒が多かった。

忘れ物の多さは生徒本人の注意散漫やうっかりといたことがあり得るものの、YCにもしばしば起こることである。親やきょうだいの介護に時間をとられて宿題や予習に時間をさくことができなかつたり、「保護者の承諾を得る」ことが困難であることなどが背景として考えられる。

#### 5. 家庭内役割や家族との関係についての相談の有無

家庭内での役割や家族との関係について、本人またはクラスの生徒から相談を受けたことがあるかどうかの質問に対して、「はい」と回答した担任は17名(11.9%)であった。

この「相談」の中には、YCとは関連しないものもあり得るが、家庭生活や家族関係についての理解は、学校教員にも求められる部分であり、そうした相談の中にYCに関連するものが含まれることを理解しておく必要がある。

#### 6. YCと思われる生徒の存在率 (Table2)

前述「4」の家庭内役割が多いために、学校生活上での問題が生じていると思われる生徒の有無について回答を求めたところ、144名中31名の担任がクラス内にそうした生徒がいると回答した。YCと思われる生徒が、調査対象クラスの21.7%に在籍している可能性が示唆された。

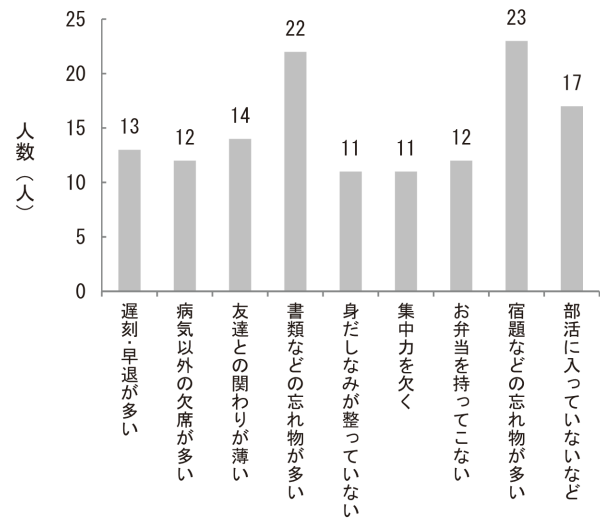


Fig.2 過剰な家庭内役割による学校生活上の影響

Table2 YCと思われる生徒の在籍率

	クラス数 (%)	人数 (%)
1年生	11 (22.0%)	15 (0.9%)
2年生	7 (17.5%)	7 (0.5%)
3年生	13 (31.7%)	30 (2.1%)
特別支援	0 (0.0%)	0 (0.0%)
合計	31 (21.7%)	52 (1.2%)

また、クラス中のそうした生徒の人数の合計は52名であった。調査対象の生徒総数4,420名であることから、YCと思われる生徒の存在率は1.2%と推察される。

これまで、国内ではYCがどれくらいいるのかについての実態調査はなされてこなかった。ONS (1996) は8～17歳の0.5%にYCがいることを示唆していたが、今回の調査はそれを上回る存在率が示された。このことは、YCがどの中学校でも各学年に1人ないし数名程度がいるものと考えerる必要があり、YCが決して珍しい存在ではないことを示している。

また今回の調査では2年生の割合が低くなっているが、家庭内役割の内容から考えれば、年齢が上がるにつれて担う役割も増えることは容易に想像がつく。この結果は、2年生のときにこうした生活上のことに気づかれにくくなっている可能性もあると考えられる。

#### 7. YCと思われる生徒について

YCと思われる生徒がクラス内に存在すると回答した31名の教員に対し、その中で最も気になる2名までについて、詳細な記述を求め、37名の生徒についての回答が得られた。

なお、ここでは質問紙の内容量の関係で、クラス内で最大2名までの回答しか得られなかった。前述「6. YCと思われる生徒」は52名があげられているため、この結果は全体の7割ほどの人数でしかないものの、ある程度の傾向は示していると考えられる。



## (1) 学年と性別 (Table3)

回答が得られた生徒の学年と性別の内訳を Table3 に示す。男よりも女に多いのは、家事援助やきょうだいの世話などが、女性に求められることの多い内容であることが反映されていると考えられる。

Table3 詳細な回答が得られた生徒

	男	女	合計
1 年生	5	8	13
2 年生	1	6	7
3 年生	6	11	17
特別支援	0	0	0
合計	12	25	37

## (2) 家庭内役割を担っている理由 (Fig.3)

家庭内役割を担っている理由として、考えられる 6 項目について回答を求めた。これらは先行研究 (ONS, 1996; C. Dearden & S. Becker, 2004) で、YC である理由としてよく挙がっている内容である。

その結果、「母子家庭もしくは父子家庭である」16名 (43.2%) と「その他」11名 (29.7%) が目立った。なお、「その他」の内容は記述のないものが多く、詳細は不明である。

ひとり親家庭であることは、家庭内役割を担う家族構成員が少ないことから、家事や小さいきょうだいの世話などを担うことが親から期待されることは十分に予想されることである。

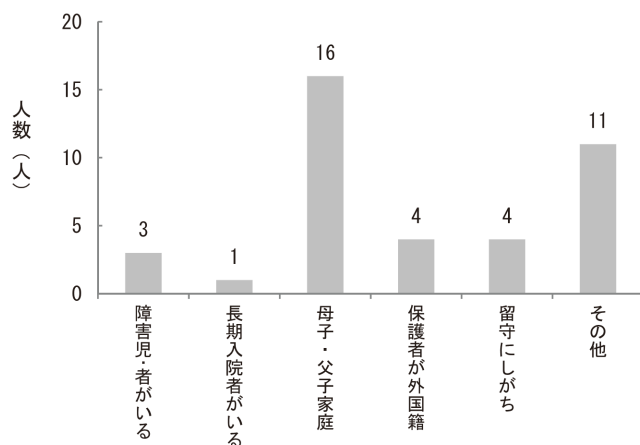


Fig.3 家庭内役割を担っている理由

## (3) 1 週間当たりの家庭内役割従事時間 (Fig.4)

1 週間当たりの家庭内役割に従事している時間については、C. Dearden & S. Becker (2004) の調査をもとに大まかに分類した 8 項目から回答を求めた。

その結果、「分からない」が 14 名 (37.8%) で最も多く、次いで「0 - 4 時間」が 10 名 (27.0%) であった。

この質問は、家庭生活をかなり詳しく知らないと答えることができないため、担任による回答には限界がある。そのため、「分からない」が最も多くなったと思われる。

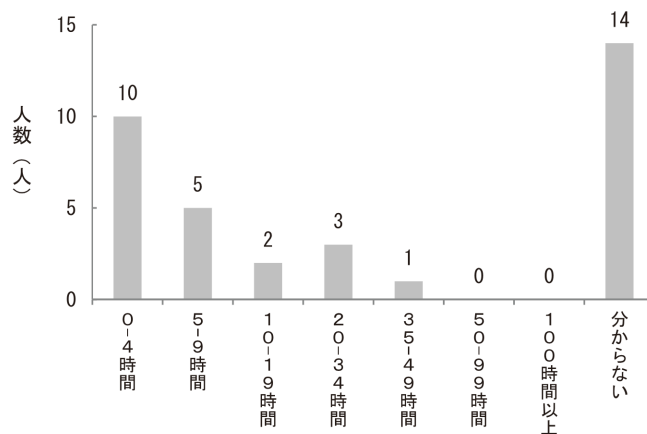


Fig.4 1 週間当たりの家庭内役割従事時間

## IV まとめと今後の課題

## 1. 「お手伝い」との違い

YC 研究における注意点の一つとして、それが家庭教育の一環としての位置づけも可能な点があげられている (柴崎, 2005)。家事の手伝いや小さい子どもの世話をすることは、家族としての当然の役割として子どもにも期待されるものでもあり、それはしつけや家族愛に関連する行為でもある。しかしそれらが家庭教育や「お手伝い」であるためには、保護者の責任のもとで行われることが必要である。家庭内で担う役割が多く、成人と同等の責任を担うようなものは「お手伝い」の域を超えている。そして、それが子どもの学校生活や友人関係に大きな影響を及ぼすまでに拡大している場合には、支援の対象と考えるべきである。

それは柴崎 (2005) が指摘するように、「家族愛」の名のもとに女性による家族介護や家族労働がシャドーワークとして捉えられてきた経緯に類似している。すなわちそれらの役割が女性に過度に担わされることによって、その女性の社会生活が大きく制限される状態は望ましくなく、その場合には介護サービス等による支援の対象とみなされるのと同じである。

ただし女性のシャドーワークに関連する事態と異なるのは、子どもは発達途上にある存在である、という点である。在宅介護を担う児童は、介護の様々な負担に応じながら、社会生活の機会を失っていくことが指摘されている (三富, 2000)。それは、現在の学校生活への影響だけにとどまらず、進学や就職にも制限をもたらし、不安定就労にまで連なるものと考えられる。

## 2. 複合的な困難さの一形式としての YC

YC は、それ単独で現れることはまれである。本調査の結果にもあったように、ひとり親家庭であったり、保護者が外国籍であったり、家族の誰かに障害があったり、長期入院していたりといった生活上の困難が背景にあると、家庭内役割を担わざるを得ない状況が生じてくることは容易に想像できる。

イギリスにおいては、ひとり親、貧困、少数民族、家族成員の薬物・アルコール依存や精神障害などの困難を

有している家庭では、子どもが多くのお家庭内役割を担っていると報告されている（柴崎，2005）。また、ネグレクトや不登校との境界も曖昧であり、保護者の養育能力が低かったり、十分な養育ができる状況にないことなどが、YC の背景にあると考えられる。

日本における YC を巡る課題を考えると、そこにはひとり親家庭、貧困、外国籍、依存症、精神障害、虐待、不登校、アダルトチルドレン、少子高齢化など社会の暗部が複雑に絡んでいる様子がうかがえる。YC の原因がそれらの事象にあるのではなく、こうした複雑な事象の一端が YC という形となって現れていると考える方が妥当であると思われる。

### 3. 家族全体へのアプローチと学校

YC は、複雑な事象の一端が子どもの側に現れたものであるならば、その子どもに対する支援だけでは不十分であることは明白である。その子も含めて、家族全体へのアプローチが求められ、それは直接にはソーシャルワークの領域である。

しかしながら、YC をはじめとした複雑な問題を抱えた子ども達が自らの家庭状況を語ろうとすることは少ない。そして YC の親たちの多くは、我が子が「普通の児童」のように外出できないことや、学校生活上の困難を抱えていることを知っているが、役割の多さゆえに生じた社会生活や友人関係の制限をやむを得ないとしていくことが多いことも指摘されている（三富，2000）。そうした意味では、児童虐待がはらんでいる課題と共通する部分も多い。

YC は今までも存在し、恐らくこれからも存在し続けられると思われる。少なくとも、こうした子どもとその家族が適切な支援を受けることで、学校生活や進学・就職への悪影響を最小限に抑え、貧困の連鎖や負のスパイラルに陥らないようにすることが求められる。

今回の調査で YC である可能性のある中学生が 1 % を超えて存在することが示唆され、忘れ物の多さに代表されるような観察可能な行動にそれが反映されていることが示された。そしてこれらの行動を観察できるのは学校だけである。学校は家族全体へのアプローチを行うには多くの困難があるが、その必要性を発見するための重要なチャンスを持っている。児童虐待の発見と同様に、学校が果たす役割は大きいと考える。

### 4. 今後の課題

#### （1）支援上の課題

YC や過剰な家庭内役割を担う子ども達については、まだ一般的な認識とはなっていない。しかしながら、近年では、障害のある子どものきょうだい（シブリング）や聞こえない親をもつ聞こえる子ども達（コージ）のことが取り上げられる機会が増えている。そうした意味では、家族成員に障害があるような場合に、他の家族成員にも何らかの支援が必要であるという認識は拡がりつつある。こうした家族に対する支援の拡がりをさらに拡大し、学校教員が広く認識することが、今後の YC への対策を考

えていく上で重要になる。

#### （2）研究上の課題

本調査は対象を中学生に絞り込むことで、YC である可能性のある生徒の存在率を推察することに成功した。しかし、中学卒業後と小学生以前の状況については、依然として状況がつかめないままである。まずは、YC である可能性のある子ども達がどれくらいいるのかについての実態調査が求められる。さらに YC であることが、発達やライフサイクルの上でどのような困難につながり得るのかについても明らかにする必要がある。そのためには、学校教育、児童福祉、障害者福祉、地域保健などの学際的な取り組みが求められる。

### 謝辞

調査に快くご協力いただきました諸先生方に深く感謝申し上げます。また、静岡大学三富紀敬教授、成蹊大学澁谷智子講師には、それぞれ専門的な立場から貴重なご指導、ご助言をいただきました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

### 文献

- Chris Deaden & Saul Becker (2004) *Young carers in the UK: the 2004 report*. Cares UK. pp4-14.
- 三富紀敬 (2000) イギリスの在宅介護者. ミネルヴァ書房, 393-481.
- 三富紀敬 (2008) 介護を担う子ども支援事業. 静岡大学経済研究, 12, 3, 23-73.
- 三富紀敬 (2010) 欧米の介護保険と介護者支援—家族政策と社会的包摂, 福祉国家類型論—. ミネルヴァ書房.
- ONS: Office for National Statistics Social Survey Division (1996) *Young carers and their families*. Government Statistical Service.
- 柴崎智恵子 (2005) 家族ケアを担う児童の生活に関する基礎的研究—イギリスの “Young Carers” 調査報告書を中心に—. 田園調布学園大学, 人間福祉研究, 8, 125-143.